

## 日本小児感染症学会若手会員研修会第2回安曇野セミナー

## ワクチン後進国日本

小山 寿文\*

「ワクチン後進国日本で小児科医は何をなすべきか？」この命題にどのように答えたらいいのか、安曇野での夏季セミナーを終えたいまも、答えられる自信はない。正直なところ、安曇野での夏季セミナーに応募したときには、このようなワークショップが開かれることはあまり気にとめていなかったし、きつといろいろなところから人が集まってきて、楽しいのだろうなあ、長野にはいったこともないし、ということしか頭になかったのである。

ワークショップの各命題について、それぞれの参加者がグループを作り、メーリングリストで情報を共有しながら事前に勉強してやることになったのがセミナー開催の2週間前、われわれのワークショップメンバー7人で実際に役割分担が決まり、曲がりなりにも活動が動き出したのは、ワークショップの1週間前であった。

ああもう時間がない、しかし何かしなくてはならない、という状況は、われわれメンバーの共通認識であったろうと思う（もちろん、話の種をたくさんおもちの先生もおられた）。そのような切羽詰った状況で、いまだ顔をあわせたこともないわれわれワークショップの仲間たちが考えたことは、

1. 日本で販売されている、すべてのワクチンの有効性について
2. 日本で販売されている、すべてのワクチンの副作用について
3. 日本の予防接種の歴史
4. 世界の予防接種の現状

5. 海外で発売されているワクチン

6. 新規開発予定、現在開発中のワクチンをそれぞれ当日までに調べてくる、というものであった。

「ワクチン後進国日本で小児科医は何をなすべきか？」という命題に対しては、その足元にも及ばぬ基礎的な内容ではあったが、日常の診療を行いながらの調べものは結構たいへんであった。筆者の場合には、日本のおかれたワクチンの現状が、世界と比較してどのような立ち位置にあるのかの基礎的な知識がないものだから、WHOのサイトや厚生労働省のサイトを引きながら、日本のワクチン、世界のワクチンを調べた。研究中のワクチンを含めると数十種類ものワクチンが研究、開発中であり、また、途上国と先進国では当然必要とされるワクチンのニーズも異なることがわかった。少し考えれば、途上国ではコレラワクチンの重要性が緑膿菌のワクチンのそれを上回るであろうことは想像できるはずなのだが、筆者はそのようなことを考える機会をもったことはなかった。今回のセミナーはよいきっかけになった。また、世界には、貼るワクチンや食べるワクチンというものも考えられているようである。

残念ながら、折からの台風で各自の調べてきた内容を共有する機会は作れぬまま、何人かのグループメンバーとは実際にお会いすることができないままとなってしまった。しかし幸いにも、予定より半日遅れて始まったセミナーでは、多屋馨子先生による「ワクチン Update」の勉強会があり、われわれが調べてきた内容を含め、ワクチンにつ

\* 長崎大学医学部小児科

いての知識を深める機会をもつことができた。

さらに、ワクチンについての知識を深める以上に参加してよかったと思えたことは、普段は論文や学会での特別講演などで壇上で仰ぎみることしかなかった先生方が、普段着で目の前にいて、気さくに声をかけてくれるといったゆったりとした空気を共有できたことと、小児科の感染症領域に興味をもって全国から集まれた先生方と、気の置けない仲間になれたことだったと思う。

「ワクチン後進国日本で小児科医は何をなすべきか？」このような高次の問題に答えることはいままも難しいが、この質問ならばこの先生に相談し

よう、あの問題ならこの先生と一緒に考えてくださるといった、たくさんの先生方と知り合うことができたことが、セミナーに参加した筆者の一番の収穫である。

お忙しいところ、ワークショップのみならず、セミナー全体を企画、運営していただいたセミナースタッフの皆様、心からお礼を申し上げます。さらに、今年、安曇野セミナーに参加した皆さん、また、今年参加できずに残念な思いをされた皆さん、またどこかでお会いできることを楽しみにしています。

\* \* \*